



木造阿弥陀如来坐像

本仏は恵向僧都の作と伝えられるが銘はない。藤原時代の名作にして俗に黒仏様と称し、古い歴史と伝説に富む御仏である。

この像は、善導寺の本尊で、宝永元年京都より下されることとなり、第九世愚誓和尚の時の古町村大山家よりお迎えのため京に登ったが不幸にして近江にて急死した。それで弟大山六左衛門が代って京に登り正徳元年辛卯歳七月十日善導寺にお迎え安置した。

当仏は全体が墨で塗られており、俗に黒仏様として崇敬されている。今禿げた所は金色燦然と光りを放っている。今禿げた所は金色に有難い御仏のためお迎え途中危難に逢うことを恐れ金色の玉躰を墨で塗り潰したと伝えられる。また一説には当仏は唐より渡来の際、御仏で海を渡るとき、龍神の眼をくらすため墨を塗ったとも伝えられる。高さ一・〇四メートル、後背を附した大仏で交通不便の二百年の昔どうして京都より運んだのか、謎とされている。本尊は松の寄木造り、豊かな頬彫りの浅い衣文、藤原期の特徴を現し、江戸期の会津仏師に大きな影響を与えたとされている。

県指 重要文化財
所在地 伊南村大字古町字東居平七十三番地
管理者 成宝山善導寺
指定年月日 昭和33年8月1日